

秋期福音特別集会 第3回講筵

キリスト・イエスの心

―ルカ伝に於けるキリストの心―

京都 1986年11月9日

天韻（小池辰雄）

キリストは心の人 タイタニック号の沈没 讚美歌「千歳の岩」 御国を賜うことは汝らの父の御意 我は火を地に投ぜんとて来れり 今日、汝は我と共にパラダイス 私たちは天国人 召団讃歌C13「全十二召団讃歌」 祈り

●キリストは心の人

マルコ、マタイ、ルカと、そのうちにまたヨハネということになりましたけれども、「ハレルヤ」28号で「心のルカ福音書」（第33回夏期福音特別集会）というのを書きました。夏の集会の内容です。もちろん今日学ぶところもこれと同種類のものであります。さきほど、マタイ伝で大事な句を拾って非常に簡単な解説をつけながらお話ししました。このルカ伝もだいたいそうなるかと思いますが、まあどうなりますか。

ルカ伝の中で、キリストは心の人ということ、一番深いのは何といつても、今読んでいただいた、この15章の「放蕩息子」のところ、実はこれは『無者キリスト』にも私は力をこめて書きましたので、また時にはお読みいただきたいと思えます。ラジオで全国放送をいっぺんやったこともあります。今これから15章をやるわけではありません。ただこの、

「心を翻して、本当に神のもとに帰り行く」

という、このことは日本もどの国も、全世界がこれをやらないと、世界歴史はどういうところに立ち至るか。20世紀は本当に世紀末でどうなるか。21世紀を楽観しているんなことを言っているようですが、そんなことでいいかということ、

人間のするすべてのことは、帰着するところは心の問題になる。魂と言ってもいいですけれども。いちばん恐いのは、いちばん厄介なのは、いちばん問題なのは心です。

その心の世界では、旧約ではエレミヤ記です。エレミヤという預言者は本当に心の預言者だった。

「人の心腸を見給う万軍のエホバよ」

という言葉がある。「ヘルツ」（心）とか、「ハート」とかいうわけですが。16章15節に、

「¹⁵イエス彼らに言い給う『なんじらは人のまえに己を義とする者なり。され

ど神は汝らの心を知りたもう。』（ルカ16・15）



パリサイ人に対して言われた。

「¹⁴ここに慾深きパリサイ人ら、この凡ての事を聞きてイエスを嘲笑う」(ルカ16・14)

という。パリサイ人それから心碎けたあの取税人の祈りのことがやはりルカ伝に出ている。非常なコントラストですね。「我を憫みたまえ」という取税人であります。これは「エン・クリスト」誌28号に出ています(第3回集会祈禱会「どん底」)。またその讚美歌も作りました(A44「パリサイ人と取税人」1986.8.2作)。

詩篇39篇がまさにそうなんです。「汝知りたもう」という。

栄西というあの坊さんは、

「心はいかに偉大なものであるか。一切を動かすものは心だ」

というようなことを語っています。しかし、イザヤ書の、

「^{いた}傷める^{あし}葦を折ることなく、^{ともしび}ほの暗き灯火を消すことなし」(イザヤ42・3)

というのはやはり深い心の世界です。

17章21節に、

「²¹……視よ、神の国は汝らの中に在るなり」(ルカ17・21)

我ら自身の中に、私たちの心の中に神の国が来るといふ。

それから18章の取税人とパリサイ人。取税人が18章13節で、

「^{つみびと}胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」」(ルカ18・13)

と云う。

そういうことで、このルカ伝は本当に心の福音書というような感じがする。ところが、この心は、心碎けた者、詩篇51篇です。けれども、結局、人間の心は非常に動揺しやすい。

「鉄心松操」(金鉄や岩石よりも堅い深厚なる真心を守り、松や竹のような正しき節操を

奨励する。出典『晋書』)

なんていう言葉もあるけれども。鉄の心、松の操みさおという。昔の人の言葉らしい。サツチャーなんていう女性おんなは鉄の心だというのはなしたが。しかし、キリストの心はそんな心ではない。深みということ。

「^{ふかみ}深処へ乗り出せ」(ルカ5・4)

というのもルカ伝ですね。強い弱いではなくて、深いか浅いかという。深さがある。ルカ伝はこの深さのある福音ですね。テイリツヒというドイツの神学者が、

「現代は深さの欠けた時代である。浅くて深みがない」

ということを、ある論説の中で言っています。

旧約のエレミヤが心の預言者としてイエスにいちばん近い。また、霊の高いことでもつてイエスに近いのはイザヤです。キリストはもう一切のものをお有もちですから。

この21章の「寡婦のレプタ二枚」の話も、キリストは寡婦の心を本当に見られた。弟子



たちが参った。二枚のレプタを投げ入れたのは自分の命の糧を投げ入れた。レプタ二枚において全身的な献身的な献金であるわけです。その心は結局——ただ心ではない、これも心身一如です——存在そのものが深い心にならなければダメです。存在そのものが深い心になる。身が深い心と一つである。そのようなときに心はいちばん深い。それは沈黙の祈りです。

沈黙の祈りにおいていちばん深いところに入っていく。キリストは夜もすがら祈られた時に、黙って祈られたでしょ。そしてその深い心はまた深い愛と一つになる。

よく、「燃える」という言葉がある。もちろん火の如く燃えることも大事ですが、また深く燃える燃え方がある。炎を発しない。じつと燃えている。鉄がそうですね、鉄が赤くなっている時は。火山が大爆発する前の深さ。そしてその心がいつか破れる。キリストの十字架上ではキリストの心は、心臓は破れた。

「彼らを赦し給え」(ルカ23・34)

というその心臓は破れた心臓です。愛の極致の心ですね。

●タイタニック号の沈没

この夏にご紹介はしなかったのですが、ちよつと触れたのはタイタニックの船の話〔The Titanic、1911年に建造されたイギリスの豪華客船。翌年の処女航海で、ニューファンドランド沖で氷山に衝突沈没し(1912年4月14日)、1513人が死亡する最大級の海難事故となった〕。その詩を書いた人がある(「汽船タイタニック号の沈没」、内村鑑三『聖書之研究』142号所載)。かなり長い詩だから全部は読みませんが、村山元子という女の方です。明治45年(1912年)4月21日にこれを書いたらしいね。始めから三分の一くらいの所から、ちよつと所々読みます。

「ニューファンドランドの沖近く、4月14日の夜の帳は今静かに彼女(タイタニックと
いう大きな豪華船)の上にかかりぬ。春なお寒き北海の寒水は彼女のうるわしき肌を刺し、
星の光は燦として暗き航路を照らす。静かなるこの夜、海には寄する小波もなく、う
ちに歓喜の響きも途絶えて、旅客は彼女の懐に眠れり。原始の如き静けき海を船はお
もむろに進み行く。青く輝く星の光に行く手に何者か見ゆ。海の霊の如く靈性なる悪
魔の如く猛悪なる、それは噫はからざりき。北の極なる氷山の今宵この時辿り来しとは。
あなやと思うこの時遅く、はやわが船首は彼に触れて致命傷を負いぬ。ああ彼女は人
生の初航海において、今死なざるべからざるか。この渺々たるわたつみの中に幾千の
望みは朽ちざるべからざるか。想え、奈落の天地はにわか裂けて、千尋の底に投ぜ
られたるを。想え、歓喜の絶頂より絶望の淵に沈められたるを。仰いで天に訴えて星
応えず。彼女の魂は消えなんとす。救命艇の備えも哀れ、その人皆を救うに足らず。
生きとし生ける者誰か生を欲せざる者あらん。まして世に為すあるべき有為の人々多



きをや。船長の命は闇に響く。弱き婦人と小児を救えと。彼女の魂は甦れり。ああ雄々しきかな、ますらお。我が身の死を忘れて、老いを助け弱きをいたわる。やがて婦人と子どもを乗せしボートは闇に包まれて去りぬ。誰か夫を残して独り生くるを望まんや。父に別れて母に従つ悲しき子らの心を想え。見送る夫、見返る妻。万斛の涙、熱涙今は却って出でず。美しき愛も暖かき心もみな彼らよりもぎ取られぬ。無量の感慨無限の痛み、海は深刻なる沈黙を保つ。ああ故国の富を担いし富者、世界を負いし平和論者、いましありてこの人の世はいかに大いなる幸を受けしか。なお世に捧げん春秋を思えば、無念の涙はからずや。しかも一人の乱るるなく、己を捨てて弱きを助け、尊き肉を弱き肉に代えて惜しまず。ああ、何処よりきたる愛ぞ。彼らの悲痛は望みなきものの如くならざりき。ああ尊きかな人の魂。聞けや、啾啾たる楽の音を。今や沈まんとするタイタニックの傾きたる船室より洩れ出づる楽の音を。「ニアラー マイゴット ツー ズイー」(神よ、われいま汝に近づく)と。死の端から今ひろき口を開いて、奈落の底より彼らを呑み尽くさんとす。しかも一人の悲しむ者なく、死を見ること帰るが如し。誰かこの力を与つるものぞ。天上の光は今彼らの上に輝く。永遠の故里に帰る喜びの崇高なる響きはやがて聞こえずなりぬ。今や雄大なるタイタニックの姿は星光に煌めく夜と見えしが、永遠に海底に没し去りぬ。ああ、尊きかなこの犠牲。海は尊き犠牲を受けて永遠に静まり、星は天上の消息を伝えて慈愛の光を漂わす。ああ遺れる寡婦、孤児の上に神の情けは露と注げり。ああ悲壮なるタイタニックの最期。船長はじめ船客の敬虔なる振る舞いは滅びんとするこの世の人にいかに力強き鉄槌を与つるものぞ。我らはこの恵まれたる靈魂の絶えず我らの耳に囁くを聴く。この世の事業のいかに進むも、この世の富のいかに増すも、この世の技巧のいかに新に入るも、この世の道德のいかに尊くなるも、ただ価なきもののために落とす愛の涙に代え難きを。仰ぎ見よ、仰ぎ見よ、見ゆるこの世は時の間にして、見えぬかの世は限りなきを。彼らは死して不朽の人格を得たり。幸いなるかな、汝タイタニックよ、汝は沈まんだめに造られたり。義人の宝血に潔められて、汝は永遠に生命を失わず、遺るこの世の旅客を乗せて、心の棹を誤らざらしめ、愛の光明を触先に灯して幾世の魂を渡すならん。この新しきエルサレムへの国へ。」

そういう詩をうたって、

「人その友のために生命を捨つる。これより大いなる愛はなし」(ヨハネ

15・13)

という、それが実証されたということですね。「ニアラー マイゴット、ツー ズイー」(讚

美歌320番「主よ御許に近づかん」の一節を独唱)

Nearer, my God, to Thee, Nearer to Thee!

Even though it be a cross That raiseth me;



Still all my song shall be,
Nearer, my God, to Thee, Nearer, my God, to Thee, Nearer to Thee!

(わが神よ、御許に近づかん、御許に近づかん。)

たとえそれが私を高く木に掛ける十字架であったとしても、

なおも、わが歌の全ては、

わが神よ、御許に近づかん、わが神よ、御許に近づかん。)

こういう歌です。それをみんなが歌いながら沈んでいったという。

私たちの中に深い愛、キリストの深い愛——これはもうイザヤ書53章がもつともよくそのことを預言していますけれども——それをキリストはそのまま十字架で実証された。世界の果てまでも、世の末までも、このキリストの十字架を無みするわけにいきません。

「十字架を負う」という言葉がありますが、この十字架に結晶している深い愛の心です。ですから、この「放蕩息子」が——我々はみんな放蕩息子みたいな者だ——これが父のもとに帰りゆく。実に帰りゆくことは生涯を通しての帰りゆきである。マルチン・ルターがあの「九十五ヶ条」の最初に、第一章に言ったあの言葉は、

「神の国は近づけり。汝ら帰りきたれよ。悔改めて、回帰して、この福音を信ぜよ。我を受けよ」

と。結局、もう帰するところは——正に帰するですね——帰ることです。

このキリストの愛の生命、愛の心、これは一切に勝つ。

「アモール オムニア ヴィンキット」(愛は一切に勝つ)

は、ヒルティの好きな言葉です。「一切に勝つ」という言い方は、私はあまり好きではない。一切を助ける、一切を救う。愛は一切を荷なう。その意味で結局、問題はこれに帰一しませぬけれども。

いつも申し上げている、ルカ伝23章43節、

「我まことに汝に告ぐ、今日、汝は我と共にパラダイスである」(ルカ23・43)

という。この最期に回帰した、悔改めた盗賊——この悪い盗賊は事実盗賊なんだ、殺人もしたかなんか知らんけれども——これがキリストの深い愛にいだかれて、最初に天界に、天国に入ってしまった。

この深い静かな愛はまたものすごく力強く燃えます。またこれは何者にも負けないし、一切のものを包んでしまうし、それから一切のものを荷なってしまう。これはもう我々が日常の生活で、小さい形ながらこれをからだで認識していかねばいかん。行為で認識していかなくてはいかん。

本当に今は、我々が示されているところの

「新宗教改革」

というようなことは、何もお題目にすることはないけれども、確かに今——プロテスタン



トの信仰は、カトリックもある程度そうだと思いますが、どことどこと言う必要はないです——今のキリスト教の世界は、それで新しく本当に証者が、ここにかしこに正直あります。その証人の一人となり、またそのような証人の群れとなつて進んで行きたい。

●讃美歌「千歳の岩」

十字架の、「千歳の岩」という讃美歌(260番)がありますが、私は皆さんがおそらく御存知ない譜を一つ知っている。それでそれを皆さんに紹介したい。これはいちばん古い讃美歌にあるんだけれども、今はない。残念だな。始めに英語で歌います。

Rock of Ages, clef for me,

Let me hide myself in Thee;

Let the water and the blood,

From Thy riven side which flowed,

Be of sin the double cure,

Save me from its guilt and power.

(ロック・オブ・エイジス、私のために裂け目、

私をあなたの中に隠しませう。

水と血を

流れたあなたの川辺から、

二重の治療法は罪である

その罪と権力から私を清めなさい。)(直訳)

1. 千歳の岩よ わが身を囲め

裂かれしわきの 血潮と水に

罪も汚れも 洗い潔めよ」

3. 十字架ならで 頼むかけなし

わびしき我を あわれみたまえ

み救いなくば 生くるすべなく」

素晴らしい譜の歌ですね。非常に心に響く歌です。

●御国を賜うことは汝らの父の御意

また元へもどります。今度はルカ伝12章32節、

「³² 懼るな、小さき群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり。」

(ルカ12・32)

これはキリストが今、本当に私たちに言っていることだと響きます。キリストの救いの現実を——本当に十字架を経て、復活なきて、天界に行かれて、聖霊をく



だされた——この事実をその順に私たちは受けとっているわけです。これをはずすわけにはいかない。だから、

「そうだ。それで行け。お前たちにこの神の御国をやるのは父の御意だ」
と。私たちは御国をいただいたら、御霊を今度は人に伝える責務がある。使命がある。

「御国を人に与えることは、汝らの仕事である、使命である、光栄である」
と。「わが光栄となる」という意味ですけれども。そういう意味で、賜りたる者は必ずそれは人に与えていく。これも、「ざるを得ない」です、もう溢れますからね。そういう溢れるこの福音を伝える。これはもう本当にそうです。

「二年に一人、本当に何とか神さま、遭わせてください。そして一人、本当に何とか救わしてください」

と。これは祈っていかなくてはいいかん。そのように展開していく。

私の兄貴は、私の親戚でただ一人のクリスチャンでした。聖書の扉に、

「救われる者の我一人ならぬを祈りて」

と書いてある。それを受けとったのは私でした。それから知らない間にだんだん展開していった。兄貴の死を無駄にしてはいかん。弔い合戦だということ、私の本当の——「本当の」と言ったらおかしいけれども——万斛ばんこくの涙の源泉はそこにある。そしてその涙は火と燃える。私を救うために死んだようなものだ。

また、私の母も本当に、この世的な意味では本当に気の毒なひとです。苦難を負いました。それは兄以上の苦難です。一人で五人を育て、もう非常に過労でした。そこにいちばん頼みにしてきた長男が仆れた。これはもう致命傷なんです。だから、失明してしまった。私はこの母とこの兄をいただいでいけば、これは神さまに為すべきことをしなかつたら、死ぬわけにいかんです。

まあそういうことで、キリストの中に私は本当に、

「主はわが避所たかりどころなり。苦しめる時のいと近き助けなり」(詩篇46・1)

と。この避所に入ったら力が来たと、こういうわけです。詩篇46篇。そして、この聖霊が来たら——いつも申し上げているとおり——もう何が来ても大丈夫。どんな事があっても絶対に行き詰まらない。

皆さん、この十二召団の方々は本当にそういう戦士で、鍛えられて行ってください。御霊があるところには、もうかこつことは一つもない。行き詰まったと思ったら、そこから道が驚くべく開かれていく。本当に祈りこんでいることは必ず成っていく。祈り以上のことが展開してくる。これが召団の証として大きな花が咲き、果が実りましょう。私が仆れようが、誰が仆れようが、この召団は聖霊の召団であるならば絶対に消えませんが、歴史の終わりまで。非連続の連続で行くんです。

親子関係というものは、これは三代続いたらいい方で、あとまたおかしなことにも



なつていくようだね。まあ何代もそれはあるけれどもさ、それがとにかく始めの志はてんでどつかへいつてしまったようなことになる。ところが、御霊の世界ではこれが展開してやまない。本当にそうです。だから、私はその点で安心している。

●我は火を地に投ぜんとて来れり

「汝ら是我よりも大なる業をなす。お前たちの中に入って、大きな業をして

いくぞ」

と。もういわゆる「信仰」なんていう言葉はいやになつてしまつたでしょ。

イザヤ書40章だ。

「エホバ行き給う。エホバ来たり給う」

という。神さまが行くんです、「神行」です。神さまと一緒に神行していく。

「汝らは神々なりと詩篇の中に出ている。何が悪いか」

とキリストは言われた。こないだ書きました（「エン・クリスト」26号、詩篇82篇「汝らは神々なり」。これは非常に躓きの言葉です、「神々」なんて言うのと。

「神の似姿に造られているお前たちは神的な存在として実存しろ」

ということを、端的に

「神々」

と言つてしまつたわけだ。

12章49節、

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何

をか望まん。」（ルカ12・49）

これはルカ伝の中でいちばん大事な言葉の一つです。

「我は剣を投ぜんために来れり」（マタイ10・34）

というのは、霊剣を投じて一刀両断をやつていく。しかし、それは本当にまた結び合わせるためだという。この火は聖霊の火です。聖霊の火を投ぜんために来た。けれども、キリストは地上では投じなかつた。天界に行つてから火を投じなかつた。聖霊の火を。

聖霊は戦いの霊であり、慰めの霊であり、もうあらゆる内容をもつた霊ですから、大変だ。

「聖霊とはなんぞや」

なんて、そんなことは説明できやしない。無限無量なる霊である。宇宙的な霊です。大変な存在だね、霊界のキリストというのは。

全く申し訳ないはなしですよ、この地上は。まあ聖書というのは驚くべき本だね、これは。何億の本があつても聖書一巻にはかなわないね。

「我は火を地に投ぜんために来れり。聖霊の火を、霊火を投ぜんために来た」

と。この火が燃えたらもういいよ。どんな嵐も、どんな寒い時にも、この火は燃えている。



もう何ものとも代えることができない。天界には何も携えないで行く。ただ聖霊だけを宿して行きます。

「お前の足跡はどうだった。血が流れているような足跡だった。お前の行為は本当にそのような愛の行為であった」

と。私はいずれ凄い詩を書きますからね。

「⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思い

逼ること如何ばかりぞや。」(ルカ12・50)

もう驚くべき言葉です、12章49節、50節は。「されど」というのは、ここは十字架だからね。十字架というバプテスマを受けたら――他のひとは誰も受けることのできないバプテスマだ――そうしたらば、

「思い逼ること如何ばかりぞや」

と。ゲッセマネの祈りです。十字架上でキリストの心臓は破れた。砕かれた。もう12章49、50節は説明も何もできません。もう平伏すだけ。そして、これをからだで受けとるだけ。全存在、からだの世界です、福音の世界は。

「我を飲め、我を喰らえ」(ヨハネ6・53〜58)

という。

「これはあなたのからだでした」

と。自分に触ってみて、そこまでいったらもう極致ですね。もうとにかく、これでもって毎日、それはもうご飯を忘れても聖書は読まないではられない。

13章5節に、

「⁵われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも悔改めずば、みな斯くのごとく亡ぶべし」

(ルカ13・5)

「汝らも回帰しなければ、かくのごとくに亡びるぞ」

と言っておられる。この悔改めた一人の罪びとのためには、煉獄れんごくの、プルガトリオ(ラテン語Purgatorium)の山が揺り動いたとダンテがうたった。それくらいに、一人のひとが福音に来て、その喜ぶ姿を見ることくらいうれしいことはないね、私も。病が癒されたではなくて。魂が、全存在がキリストに向かって喜んで進んでいく。

「上着を脱ぎ捨てて躍り上がりて」(マルコ10・50)

という、それを見るほどうれしいことはないですね。

恐ろしい言葉がある。18章8節、

「⁸……されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや」(ルカ18・8)

もう世はだんだんダメになっていく。恐ろしいね、キリストはもう見ておられる――「だけれども、例外がある」とは仰らない――「信仰を見んや」という。

「ああ、でも例外があつたね」



と仰ってくださいますよ、もちろん。

「小さき群れよ」(ルカ12・32)

という。全世界が悔改めるといふことはありえない。これはもうひっくり返ってしまう。

●今日、汝は我と共にパラダイス

キリストが好きな言葉は20章17節、

「17……造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる」(ルカ20・17)

キリストはみんなに棄てられました。弟子にまで棄てられた。ローマの官憲言わずもがな、
 教法師、祭司、群衆、皆に棄てられて天涯孤独。これがしかし世界の本当の「隅の首石」になっ
 た。この首石がなければ崩れてしまう。そのキリストは、申し上げている通り、

「なにゆえ私を善いと言うか。神ひとりのほかに善いものはないよ」(ルカ

18・19)

と。18章19節。そういうイエスですよ。

「何でもない、私は、何者でもない。ただ神のみだ。神だけだ」

そういう無の世界から発するところの、この御言、御業がいかにも無限無量かということ
 に驚嘆します。だから、

「我を見し者は、父を見しなり」

と言われた。もうどう考えたってそうじゃないですか。いいよ、みんな私の無に躓いたって。
 仕方がないよ、キリストに躓いていることだ。

21章36節、

「36……常に祈りつつ目を覚ましおれ」(ルカ21・36)

これが祈り心ということ。私も集会を始めたのは36歳からだから、それから10年か15年
 位はうんと祈ったですよ。水曜や木曜に祈禱会もやるし。それでいろんな事が起きるもの
 だから、逃げて行ったやつもいるし、いろいろ分裂してしまった。この頃は私は静かなも
 のだから、武蔵野がいちばん静かで困るよな(笑)。しかし、簡単なんだから、私は祈りが
 非常に。すぐその世界に入ってしまう。だから、この祈りところは聖書を読んでいること
 がもう祈りだから、しょうがないです。あなた方が本当に魂をこめて読んでいるのを聞い
 ているだけで、私はもう祈りの世界に入ってしまう。時々、異言が出たり。

司会をしてくださる方は誰もみんな凄いや。私は本当にうれしい。やはりこういう特別
 集会というのは大事なんですよ、正直。まあ普段は大事でないというのではないけれどもさ。

「普段、先生の話聞いてるから、あんな遠方まで行かなくてたつてもいいや」

なんて思っているやつもいるんだよな(笑)。ダメですよ、やはり犠牲を払って来るだけの
 ことはあるんです。時間がとれなかったら、ちよつと病気だということ(会社を休んで)
 出てくればいいんだ。そういう偽りはわるくはない(笑)——わるいことを言っているね。



いや、偽りでない――

「とても行かざるを得ないんです。すみませんが、今日は早引けして行きます」とはつきり言えればいいんだよな。教員なら、

「他の人にお願ひします。時間割を変えます」

とか。少し調子がわるかったら、やって来れば治ってしまう。こういう幾つかの召団が集まるといふことは非常に意味のあることなんです。やはり顔と顔を相合わせるということは大なることです。

どの福音書を見ても、終わりは十字架と復活だから、本当に凄いね。これにいちばん力こぶを入れているんだから、どれを見ても、十字架と復活に。それで使徒行伝の聖霊のところをいい加減にしているから、これは困る。あそこまで福音書に入れておけばよかったんだ。

あの「マタイ受難曲」なんていうのがあるだろ。だけれども、それから聖霊の曲がやってこないじゃないですか。何とかいうスペインの画家（エル・グレコ El Greco、1541～1614）が、ペンテコステの時に皆の頭に火が灯っている絵を描いた。象徴的な絵です。あの絵があったら私は額に掛けたいけれども。

私は地上を終わったら、私はもし墓ができたなら――墓はどうでもいいけれども――

「今日、汝は我と共にパラダイスにあり」（ルカ23・43）と、これを書きたいな、ルカ伝23章43節を。

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。それで、結論はこの句なんです。我々はいつも今日という時に、キリストとパラダイスを歩いている。地上において。

「お前のいるところは、パラダイスだ、私が一緒にいるし、聖霊がお前の中にいるだろ。パラダイスだ。そこにパラダイスを展開して行け。隣人をパラダイスの中に入れて」

と。福音は決して一人ではない。必ずその友を呼ぶ。友をつくる。

キリスト教年鑑の（教会名簿の）中にこのグループ（召団）のことが載つかるわけですよ。みんなの人数（会員数）がいつも変わらないとダメなんだよ。少し増しておいたけれどもね（笑）、未来完了で。ちゃんとそれに沿ってくださいよ、1987年にはこうなるというわけで。水割りではないよ、あれは実質的に。東京は始めから「100人」なんて書いてしまったものだから（笑）。なかなか100人にならない。

「何やっているか」

と言いたいんだけど。まあそれは古い会員も入れれば、なるかなんか知らんけれども。そんな数はどうでもいい。とにかく、

「質的に地道な伝道をせざるを得ません、私は本当に楽しいです」



ということですよ。

● 私たちは天国人

それで今、結論を言ってしまったんだけど。

「汝（もしくは汝ら）、我と共にパラダイスだ」

と。だから、私たちは天国人です。天国人。地上における天国人。彼岸は即此岸である。これが天地一如ということ。終末的将来がやはり現在である。過去も贖い取ってしまう。だから、「永遠の今」というのは凄いです、本当の現実、本当の現在は、信仰の世界は本当の現在です、現在の世界。この現在において永遠が生きている。

「我は有りて在らしめるものである」

という、そういう天国的存在です。

大学生であっても、友人を引つ張ってくるんですよ、逃げて行つたって構わないから、奥田先生のエマオ会に。来たりて見よと。本当に

「来たりて見よ」

の世界だね、この福音の世界は。

「天国人」というのはいい言葉だね。パウロは不思議な

「第三の天」

と言ったけれども、我々はこの天国人で第三の天——そのようなキリストと一つにあるところは第三の天——に在る。だから、周りに何か知らんけれども、見えざる光が浸透していくわけですね。まあとにかく、皆さん、何も私はそんなくだ言うことはない。

一つのことを、「自分はこういうことをする」ということを、祈って決めてかかる。そして、やっているうちに、決してマンネリズムでなくて、ヒルティが言っているとおおり、第二の天性になっていく。それが習慣というものの、第二の天性です。

私は夜型なものだから、だいたい乗つかつてくると、10時頃から、あるひらめきが来ると、グーツと詩ができてしまうんだな。あの全召団の詩（召団讃歌C13「全十二召団讃歌」）だつて一晩で書いたんですよ。どうも不思議だね、そういうことは。エレミヤが、

「我は神の言に酔えるがごとし」（エレミヤ23・9）

と言った。他のものに酔ってはいかんけれども、神さまの御言には酔うくらいになる。それは身につきます。血となり肉となります。まあね、私は8歳になってこんなことを言っているんだけど、まったく呑気な時代が多すぎた——まあ呑気でもないけれども、それは勉強もしたけれども——福音の世界では無教会が長すぎた。しょうがない。けれども、神さまは一人びとりにのつびきならぬ道を歩かせますからね、人を羨むことはひとつもない。その間違いや、迷いやなんかを通して、その人は本当にいい所に連れて行かれることもあるし、スーッと行く人もあるし、人によっていろいろだ。どれだつていいんだ。到



り着く所は一つですから。そして、一人ひとり、それで遅すぎたなんていうことはないし、それで早すぎるといふこともない。とにかく、

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれる」(ルカ11・9)

ということ。これはゲートルが『ファウスト』の中で、

「常に絶えず追求する者は、天界から愛の救いがくる、助けがくる」

と、『ファウスト』のお終いの方に書いてある。あの追求するのは——ゲートルという人は若い時に異言の体験まである人ですよ、『牧師の手紙』という素晴らしいのがある、福音の本流を語っているところがある——展開してやまない、追求してやまない。上から助けがくる。

ところが、我々は追求してやまない原動力がある。これが聖霊なんです。聖霊があると、追求してやまない。これがいわゆる努力ではない。もちろん人間だから努力という面もありますよ。ありますけれども、これはいわゆる努力ではない。だから、ありがたい。楽にやっていかれる。楽にしかも力が入ってくる。これは上昇カーブですと行く。

ところが、「わが信仰」なんていってね、

「自分の信仰は自分だ」

と思って、始めはいきがよさそうだけれども、これは放物線で下降してしまう。聖霊がないとこういうことになる。こういう信仰が多いんだ、みんな——ひとの悪口を言いたくはないけれども、私は無教会出身でしょ——終わりになるとこんな(下降カーブの放物線)になってしまう。私は無教会から出たんだ、出身だから。文字通り、身が出ってしまった。だから、グーツと逆カーブ(上昇カーブ)です。それで展開してやまない。

私は易者にわざわざ見ってもらったわけではないけれども、ちゃめだからさ、大晦日に高島屋の前を通ったら、高島屋易団がやっていた。易者はなかなか達人だよ、22、23人くらいいた。

「この中に婚約している人が三人いますね。はい、あなたとあなたとあなた」

と、ピシヤリと当てた。すごい野郎だ。

「来年の5月頃に交通事故に遭いそうな人が二人いますが、それは名指さないけれども、あとで幕の中で話しますよ」

と。私は三番目に入れられた。そして私の手相を見て、

「あなたは天に関係してますね」

と。ちゃんとそういうことを言う。宗教の世界に関係する。

「来年は運命が変わりますね」

と。私は学校を辞めようと思ったからね。ちゃんと見やがった。

「小学校のときいっぺんちよつと相当な病気をしましたね」

と。はい、急性腎臓炎でもって一学期休んだ。



「学校出る前にもういつペンやりましたね」

と。やったからね、みんな当ててしまうから。すごいね、あれは。そして、

「あなたはこれから上昇カーブですね。90は必ず突破しますよ」

と(笑)。そういういろんなことを言っているうちにこつちが福音の話をする、今度は向こうが承ることになった(笑)。全くおもしろいよ。

何を聞いても、決してそれで私はそれにとらわれることがないですから、この福音の世界は。ちゃんとオリエンテーションできます、位置づけができますから。

「福音をやっているくせに、先生は易なんかやっている」

なんて、冗談じゃないよ、易やっているんじゃないよ何も。本当に自由の世界です。そして一切のものを包摂してしまう。それはもう大変なもんだ。キリストは一切を包摂する。だから、宇宙的なんです。

「シャローーム、ラーケーム」(汝らに平安があるように)(ルカ24・36)

と。最後の言葉だ。「シャローーム」「平安」。「汝らに平安あれ」と。私は新約聖書のヘブライ語のものをもっている。だいたい、ヘブライ語で語っているんだからね、この福音書なんていうのは。もう言うことなし、あなた方ももう聴くことなし。あとは聖書を読むことだけ。まことにおおまつでございましたが、あとは祈ります。おわり。

● 召団讃歌C13 「全十二召団讃歌」

召団讃美歌の、「エン・クリスト」誌28号に出ている「全十二召団讃歌」を歌います。

C13 「全十二召団讃歌」(作詩1986年4月19日)

(A曲：一高寮歌「アムール川の」)(B曲：三高寮歌「紅萌ゆる岡の花」)

1 駱駝の毛織皮の帯

蝗と野蜜喰う人

ヨルダン川に現れて

水の洗礼ほどこそせり

2 されども彼は宣べ伝う

「我より後に來たる者

3 旧き律法を乗り超えて

燃ゆる聖霊のバプテスマ!

4 キリスト・イエス故里に

聖旨のままに歩きける

5 ガリラヤ湖畔を歩みゆき

容れられずしてガリラヤへ

6 彼らは直ちに網を棄つ

「時は満ちたり神の国

7 直ちにイエスに従えり

神の福音身に受けよ」

8 北の丘なるキリストの

シモンとアンデレ見給えば

9 「我に従え汝らを

人を漁る者とせん」

10 ヤコブとヨハネ相繼いで

信即行の福音ぞ

11 大告白はモーセより

信即行の福音ぞ



- 8 はるかに深きみ霊なる
神の憐みあわれキリストに
苦しみ悩み癒いやされて
- 9 生まれながらの我々は
人はのこらずエゴイスト
キリスト・イエスは自らを
義と愛の死を遂げ給い
かくて我らの罪の根は
この無の根源現実
この十字架の贖罪の
見よ眼前のこの牧場
この陽の光清き風
主の復活の生命いのちかな
恵まれたるぞ汝今日
み霊を受けて無量なる
キリスト・イエス無者なるぞ
無即無限の現実を
- 10 自由と愛の律法おきてなり
現れたれば身じんしん心の
救われし人数知れず
我執の罪の罪つとびとよ
この罪の世を如何いかにせん
羔こひつじとなし十字架に
我らの罪を贖あがなえり
根こそぎせられ無罪なり
過去現在も将来も
門をくぐりて投身なげみせよ
緑の野べよ水の辺べよ
み霊の光霊風よ
噫ああ新生よ永遠とこしえの！
- 11 十字架により無者となり
天国体となりたれば
さればみ神と一如いっしょにて
その言行ごんごうに現まわせり
我らも自身もドラマなり
この劇中の力なり
- 12 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 13 エンクリストの現実ぞ
苦しみ悩み来らば来よ
耐えて忍びて突き破り
エンクリストの現実の
主なるイエスと一如いっしょにて
使徒らを慕ほう兄弟姉妹あなよ
左顧右眄さこうべんなく進み往け
噫主の霊体慕わしや
永遠とわの生命を我は生き
人は各々賜たまわれる
神は自ら指揮コンダクター者
噫人ああの世の混濁まじりよ
- 14 十字架の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 15 絶対次元の人として
み霊の自由に生きよかし
その血と肉を飲み喰くらい
わが使命をば果たさなむ
使命に生くるあるのみぞ
大交響曲シンフォニーを奏かなで給たまう
20世紀の世紀末
- 16 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 17 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 18 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 19 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 20 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 21 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 22 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 23 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん
- 24 十字架なくばサタン来て
混乱みだれの渦うずに捲まぎ込こめん
無即無量の奥義なり
祈り入りてぞ身につけん
み霊の力いや増して
み霊に在りて進み往く
有難ありがたきをば味わいて
福音よきあしを身証あかしせん

25 核の兵器を如何にせん
平和の道は唯一つ

爆発すれば世の終末！
その源の平安を

26 神のみ前に平伏して
かくて互いに恕し合い

体受することあるのみぞ
愛の握手を交し合い

27 各民族の特性を
いざ十字架を荷いつつ

歎ひ合いて謳わなむ
我らは往かん世の旅路

28 傷つき倒れ起き上がる
聖霊の愛は歓喜の

み霊の力不屈なり
源なれば相愛し

29 聖霊の愛は力あり
十二召団身証せよ

み国の現実を今日もまた
火よりも熱き愛なるぞ

30 神の歴史の一環を
聖国の栄光見ゆるかな

一対一の伝道を
承りて進み往け

私はこれを書いていて泣いたです、本当に。泣きました！ 本当に涙を流したです。キリストの心に打たれたです。ありがとうございます。おわかります。

● 祈り

祈ります。限りなき愛の主さま。北は北海道札幌、栃木、埼玉、東京、裾野、信州、京都、奈良、大阪、岡山、四国、鹿児島。十二の召団を一つひとつ呼びましたが、どうぞ、この一つひとつの召団をあなたが深く顧み、力強く導き、そして、その召団召団を通してあなたのご栄光を現してください。私たちは本当にお互いに助け合い祈り合って参りたく存じております。このようにしてこの不思議な十二の召団を、あなたがつくってください、そして私たちはこの不思議な徴の如き数を、あなたの天的な数としていよいよ私たちは天国人としての証をして参りたく存じております。どうぞ、鍛えてください。そして、また逢う日までと、本当にそれまでの実存を通して、また逢うときは本当にお互いの顔がより輝いて、より飲んで逢うことができますように願ひ奉ります。また、それぞれの問題や課題をあなたが必ず善きに導いてくださることを信じて御名を讃え奉ります。

今日は本当にこのたびの集会、京都の奥田兄弟およびその群れの方々を通して、このよくな兄弟愛をもって私たちをもてなされ、本当に感謝いたします。この友情をあなたがどうぞねぎらってくださいるように願ひ奉ります。いよいよ私たちは希望に燃えて進んで参りますが、これをすべて深く顧みそして力強く導いてくださることを信じて御名を讃え奉ります。心からの感謝と讃美、主イエス・キリストの御名にあって祈り奉る。アーメン。

